Japanese Association of Educational Psychology



資料

# 青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造

落　合　良　行*

## 目　的

孤独感は，青年期における基本的な生活感情であるといわれてきた。そして，最近，孤独感に関する研究が，いくつか発表されている（Dorothy, 1976, 落合，1974, 1982, Russell & Peplau, 1980）。また疎外感，充実感といった生活感情についての研究も行われている（Geiwitz, 1966, 宮下・小林，1981，大野，1984）。それによると，孤独感は，それらの感情に含まれていたり，それらの感情と同義とされており，生活感情間の関連は必ずしも明らかでなく，また研究もされていない。そこで，本研究では，青年期における代表的な生活感情間の関連構造を，孤独感を中心にして解明することが試みられた。以下の3段階に分けて解明が行われた。(1)青年期における代表的な生活感情を調査，選択する。(2)(1)で選択された代表的な生活感情をクラスター分析によって分析し，感情のグループわけをする。(3)孤独感に焦点をあてて，青年期における生活感情の関連を，構造という観点から解明する。

## 方　法

目的の(1)(2)(3)に対応して，次の方法がとられた。(1)代表的な生活感情を選択するために，公立高校2年生118名，国立大学4年生144名に，最近感じている感情名3種類と，その各感情に関する400字程度の説明が求められた。この手続により収集された感情について，分類整理が行われ，さらに記述頻数をもとに，代表的な生活感情が選択された。(2)選択された感情を，最近どの程度感じているかということが，「いつも感じている，ときどき感じる，まれにしか感じない，まったく感じない」の4件法で調査された。この選択肢に1～4点が与えられ，回答をもとにして，生活感情のクラスター分析が行われた。被調査者は，公立中学2年生（13歳）324名，公立高校2年生（16歳）384名，国立大学2年生（19歳）328名，同4年生（22歳）357名（どの群も男女ほぼ同数）であった。(3)孤独感を含むクラスターについて，上記の4件法による調査結果を資料として，因子分析が行われ，孤独感を中心とした生活感情の関連構造が解明された。

## 結果および考察

### (1) 代表的な生活感情について

最近感じている生活感情に関する調査の回答には，同感情名異内容また異感情名同内容の記述がみられた。そこで，感情名とその説明とがあわせて検討された。その結果，感情名は，94種類に整理された。そのうち記述頻数の多い次の21の感情が，代表的な生活感情として選択された（目的(2)のための調査票に添えた説明を付記する）。①充実感，②不安な感じ，③やることが多くあるのに，はかどらないというあせり，④自分は劣っているという劣等感，⑤自分はひとりだという孤独感，⑥感動や感激，⑦どうしようもない無気力感，⑧いらだたしさ，⑨疲労感，⑩幸福感，⑪ゆううつな感じ，⑫こわいという恐怖感，⑬空虚感（むなしさ），⑭これからに希望をもつ期待感，⑮疎外感（のけものにされた感じ），⑯あきらめ（諦観），⑰たいくつな感じ（倦怠感），⑱自分がいやだという自己嫌悪感，⑲よろこび，⑳解放感，㉑嫉妬。

### (2) クラスター分析の結果について

クラスター分析は，各年齢群別および全年齢をあわせた資料について行われた。どの資料についても，類似度の指標としては，ピアソンの積率相関が用いられた。そして，クラスタリングは，群間平均距離法（average linkage between merged groups）と最遠隣法（further neighbour method），最近隣法（nearest neighbour method）の3つの手法で行われた。結果は，どの手

* 静岡大学



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



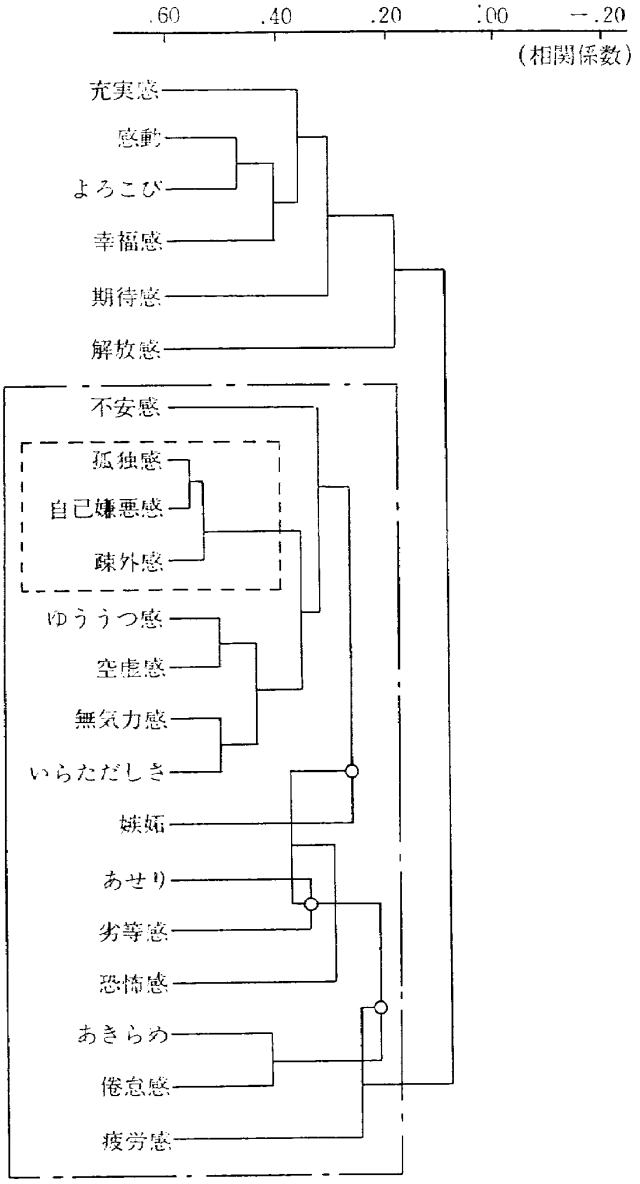


**FIG. 1** 中学生（13歳）における孤独感の類縁感情（平均距離法）

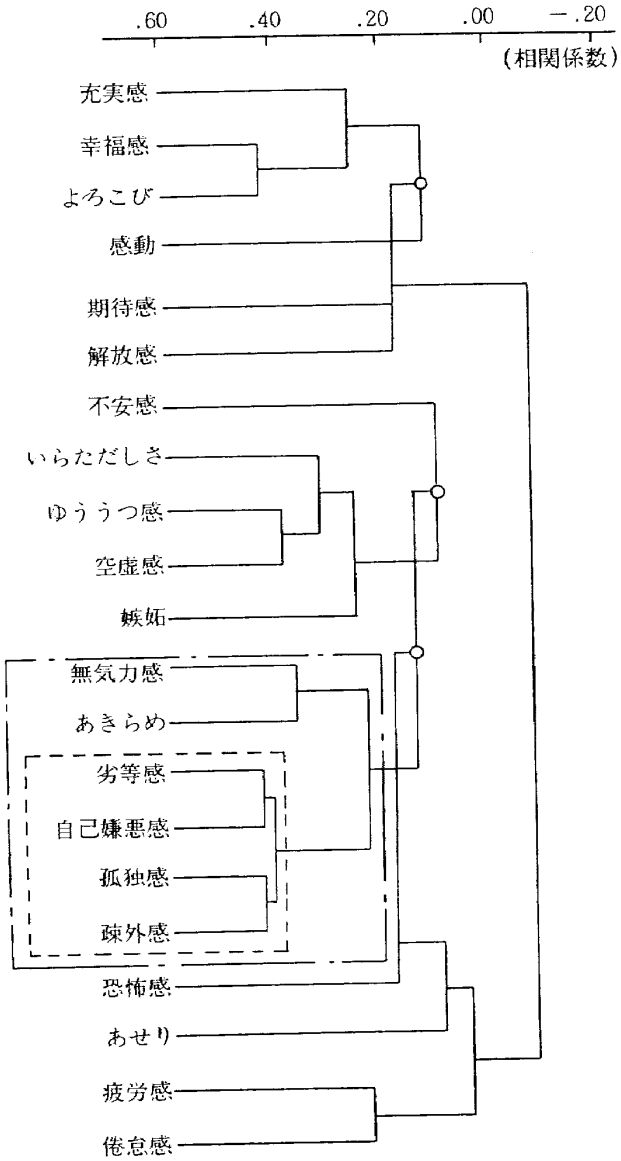


**FIG. 2** 高校生（16歳）における孤独感の類縁感情（平均距離法）

法を用いても，ほぼ同じであった。そこで，ここでは，各資料の3種類の分析結果のうち，デンドログラムに表わした際，クラスター形成を表わす線の重なりが，最も少ない結果が採用された。それが，FIG. 1～5である。なお，孤独感を中心にした分析・考察を行うことを目的としているので，孤独感とかなりの相関があるとみられる相関係数0.4と，低い相関があるとみられる0.2を基準に，図中に点線で囲みを入れた。

各図の結果をまとめてみると，中学生，高校生，大学生および青年期全体についての分析結果どれをとっても，生活感情は，大きく2つに分けられる。そのうち1つは，充実感，感動，幸福感，よろこび，解放感，期待感の6感情からなる感情群で，他は残りの15感情からなるクラスターである。この前者は，一般的に積極的または肯定的な評価をうけやすい感情である。一方，後者の15感情は，一般的に消極的または否定的な評価をうけやすい感情である。この中に，孤独感も含まれている。そして，15感情内のクラスター構成は，年齢によって変化し，一定ではない。

さらに，孤独感に焦点をあててみると，次のことがわかる。中学生（13歳）では，相関係数0.4以上の孤独感の類縁感情は，2，0.2以上の感情は，14であり，孤独感は，自己嫌悪感や疎外感と類似した感情であることがわかる。高校生（16歳）の孤独感に最も類似している感情は，疎外感であり，次に類似しているのは，劣等感と自己嫌悪感であった。これら3種類の感情が，孤独感と相



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



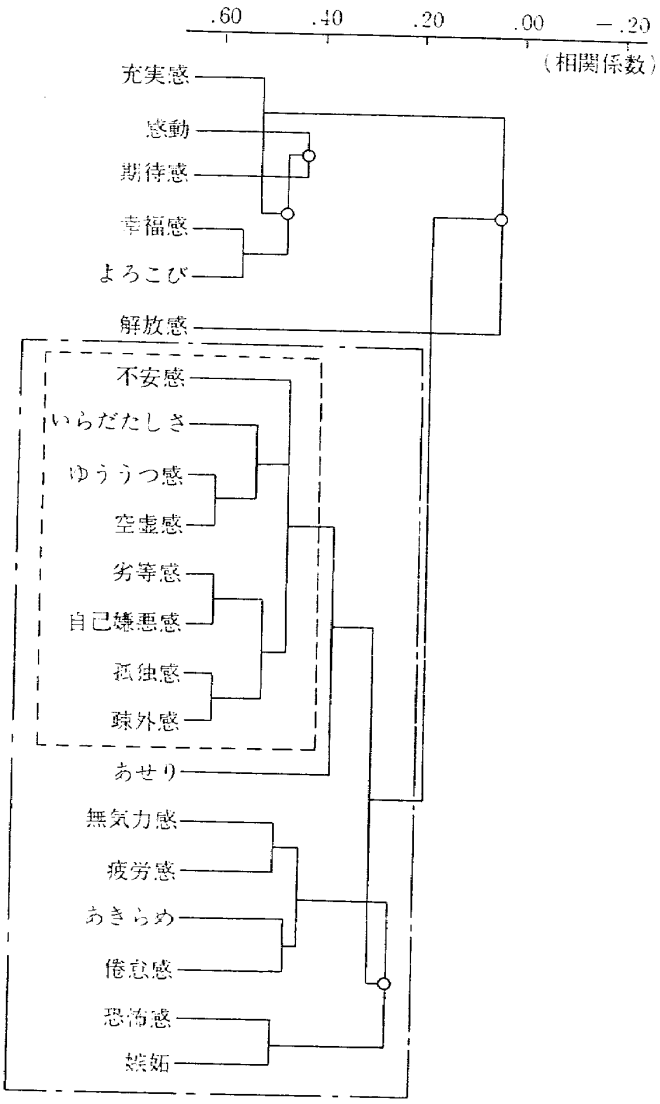


FIG. 3 大学生（19歳）における孤独感の類縁感情（最遠隣法）

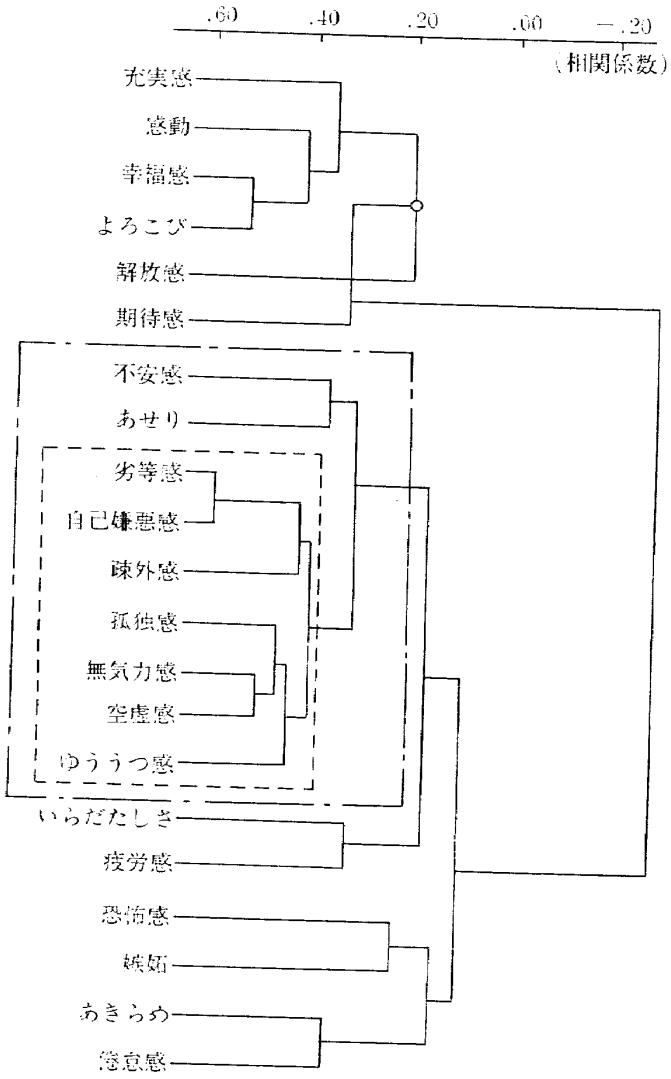


FIG. 4 大学生（22歳）における孤独感の類縁感情（最遠隣法）

関係数0.4以上で結びついており，かなり相関のある感情としてあげられる。また，大学2年生（19歳）では，孤独感との相関係数が0.4以上のクラスターに入るのは，7感情であった。そのうち，孤独感に最も近い類縁関係にあるのが，疎外感で，次に，劣等感，自己嫌悪感であった。そしてそれについで，不安感，いらだたしさ，ゆううつ感，空虚感であった。さらに，孤独感との相関係数が0.2以上のクラスターに含まれる感情は，以上の感情に7感情が加わり合計14感情であった。大学4年生（22歳）では，孤独感と相関係数0.4以上で，かなりの相関がある生活感情は6感情，0.2以上の低い相関があるのは8感情であった。かなりの相関がある感情のうち，孤独感に最も近い類縁関係にある感情クラスターは，無気力感と空虚感から成り立っていた。それに次いで，ゆううつ感が加わり，さらに，劣等感，自己嫌悪感と疎外感が，孤独感と類似した感情としてあげられる。以上の結果から，概して次のことがいえよう。青年期における自分はひとりだと感じる孤独感は，のけものにされたという疎外感を感じている者が感じやすい感情であり，次いで，不安感，劣等感，自己嫌悪感を感じている者も感じやすい感情である。いいかえると，生活感情としての孤独感を感じている者は，疎外感をはじめとする4つの感情を感じやすい者であると思われる。このことから，青年が孤独感を感じる心理状態は，疎外感や不安感，劣等感，自己嫌悪感を感じる心理状態に類似していると考えられる。そして，青年自身は，疎外感等の感情と孤独感とを分離することが難しいことも多いと思われる。

**(3) 孤独感を中心にした生活感情の関連構造について**

以上のクラスター分析により，生活感情の階層的な群



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



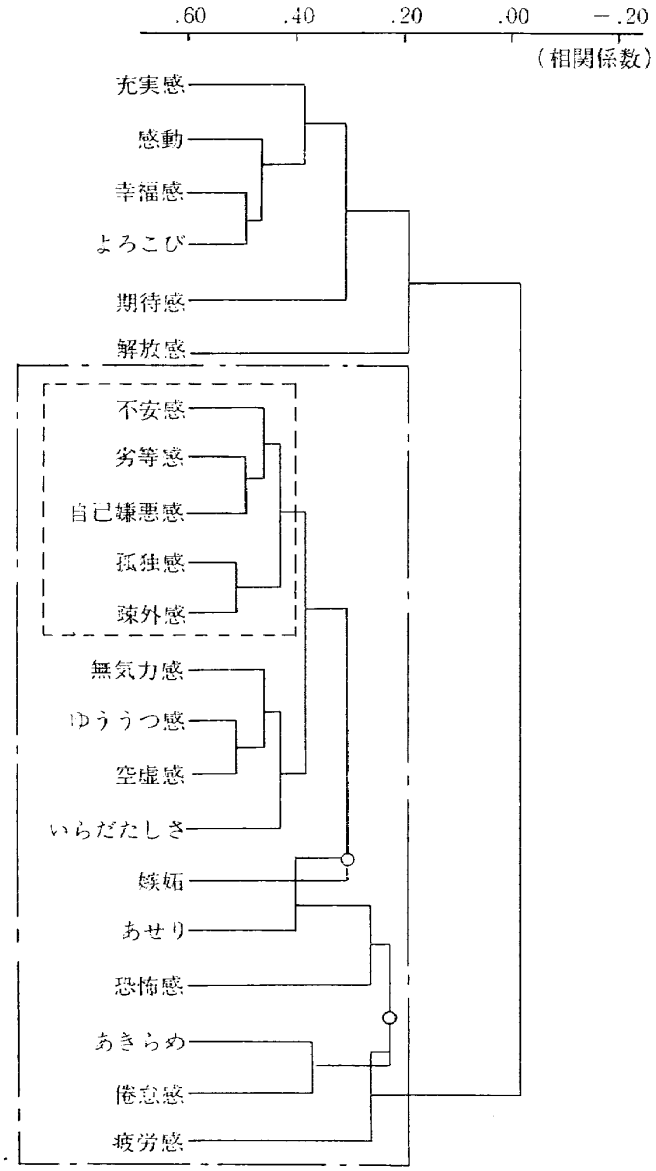


**FIG. 5**　青年期における孤独感の類縁感情
（平均距離法）

分けが行われ，孤独感の類縁感情が明らかにされた。そこで次に，孤独感とその類縁感情との関連構造が解明された。(2)で明らかにされたように，21の生活感情は，青年期においては，どの資料の分析においても，大きく2つのクラスターに分れた。そのうちの15感情からなるクラスターに，孤独感も含まれている。そこでここでは，後者のクラスターに入る15感情が孤独感の類縁感情とされた。そして，中・高・大学生すべての資料をまとめて，因子分析することにより，青年期における孤独感とその類縁感情との関連構造が解析された。因子分析は，主因子解によって行われた。第5因子までの固有値は，第1因子6.23，第2因子2.75，第3因子0.88，第4因子0.67，第5因子0.60であった。固有値が1.0以上

**TABLE 1**　代表的な生活感情とその因子分析結果

| 生活感情 | 因子負荷量 I | 因子負荷量 II | $h^2$ |
|---|---|---|---|
| 不安感 | .59 | .76 | .93 |
| あせり | .28 | .76 | .66 |
| 劣等感 | .71 | .57 | .83 |
| 孤独感 | .81 | .57 | .98 |
| 無気力感 | .27 | .58 | .41 |
| いらだたしさ | .37 | .68 | .60 |
| 疲労感 | .05 | .54 | .29 |
| ゆううつ感 | .59 | .57 | .67 |
| 恐怖感 | .58 | .11 | .35 |
| 空虚感 | .62 | .57 | .71 |
| 疎外感 | .82 | .23 | .73 |
| あきらめ | .44 | .22 | .24 |
| 倦怠感 | .28 | .07 | .08 |
| 自己嫌悪感 | .78 | .57 | .93 |
| 嫉妬 | .72 | .23 | .57 |
| vp | 4.94 | 4.04 | 8.98 |
| % | 32.93 | 26.94 | 59.87 |

の因子は，第1因子と第2因子の2因子であり，第3因子以下の因子とは，はっきりした差がみられる。そこで，第1因子と第2因子が，有意な因子とされた。次に，この2因子について，バリマックス回転(直交回転)が行われた。その結果が，TABLE 1である。また，回転後の因子負荷量をもとにして，生活感情の関連構造をモデル的に図示したのが，FIG. 1である。これは，横軸（第1次元）に第1因子の負荷量，縦軸（第2次元）に第2因子の負荷量をとり，各感情をプロットして作成された。

次に，FIG. 1について，各次元（因子）の命名が行われた。第1次元は，4つの平行した筋が並んでいる。その1つに孤独感，自己嫌悪感，劣等感，空虚感，ゆううつ感，無気力感を含む筋がある。その他に，不安感，あせりを含む筋，疎外感，嫉妬，あきらめを含む筋，恐怖感，倦怠感を含む筋がある。このようにこの次元の1つの極には，孤独感や疎外感さらに嫉妬といった，人と一緒にやっていこうとするにもかかわらず，それがうまくいかない状態で感じる感情が存在する。つまり，人との親和を求めているのにそれがうまくいかない時に感じる感情が存在する。また，その反対の極にあるのは，あせり，無気力感，倦怠感といった感情である。これらは，目標を達成しようとするが，自分の能力が十分に発揮できないため，または自分の能力不足のために，現実には目標の達成ができそうもなく，達成したいと思っている目標が，だんだん自分とかけ離れていく状態で感じる感



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



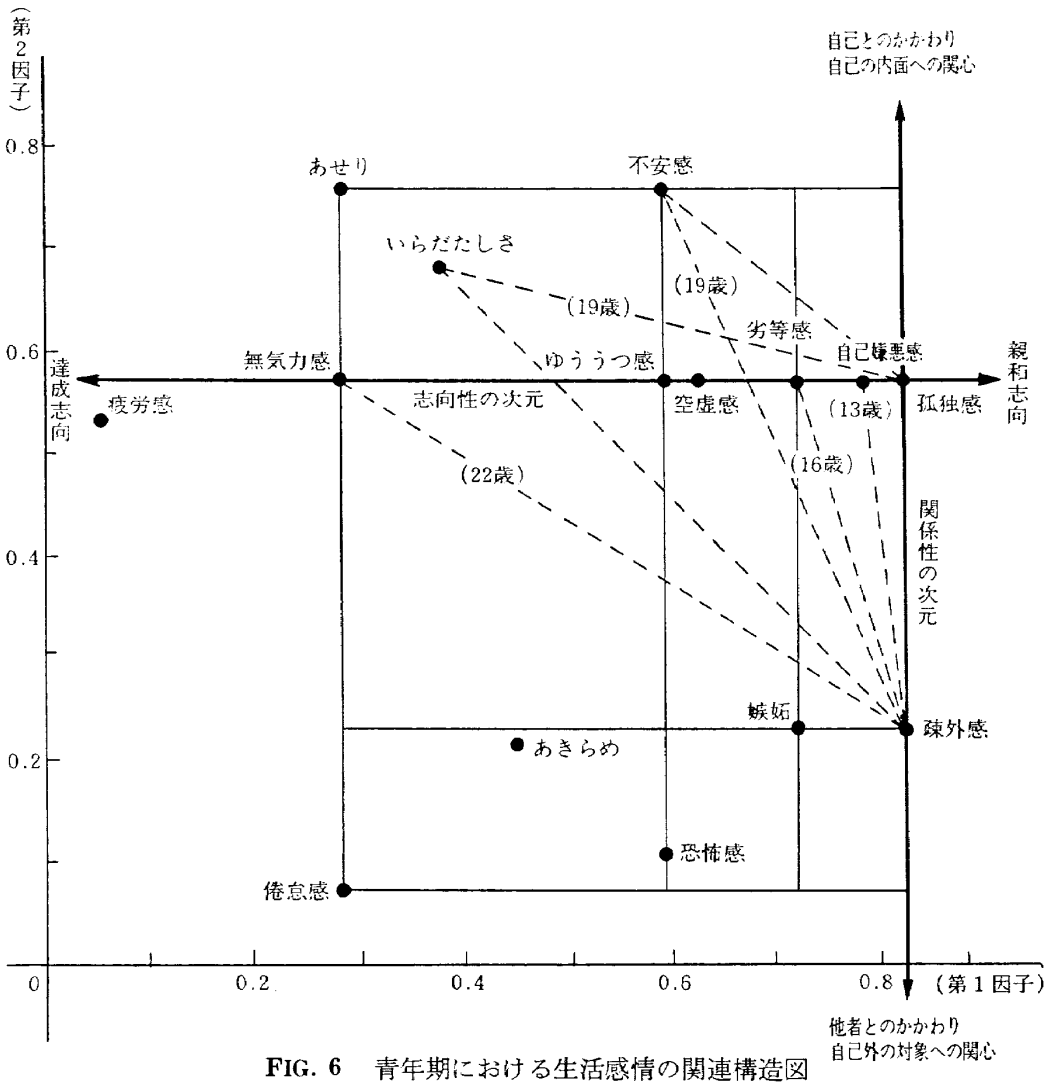


FIG. 6　青年期における生活感情の関連構造図

情である。このことから，第1次元は，「親和志向をもちながら，それをうまく実現できない状態」と「達成志向をもちながら，それをうまく実現できない状態」とを両極とする志向性の次元と命名された。

また，第2次元には，4つの平行した筋が並んでいる。その1つは，孤独感や疎外感を含む筋である。またその他に，劣等感，嫉妬を含む筋，不安感，ゆううつ感，恐怖感を含む筋，あせり，無気力感，倦怠感を含む筋がある。このように，この次元の1つの極には，疎外感，嫉妬，恐怖感，倦怠感といった感情が存在する。これらの感情は，個人が関わっていく対象（人やもの）が，その人自身より外側にあり，はっきりしている場合に感じる感情である。一方，その対極にある感情は，不安感，あせり，無気力感，空虚感といった感情である。これらの感情は，個人のかかわっていく対象が，その人自身のより内部にあり，漠然としている場合に感じられる。以上のことから，この次元は，感情を感じとる人とそのまわりの人間や環境との関係性の次元と命名された。

次に，この関連構造図をもとにして，孤独感について検討が行われた。それによると，孤独感とは，親和志向がかなり強く，しかもそれがうまく果たせない状態にいる人で，かなり自己の内面に関心をもっている人が，感じる感情であるといえる。先のクラスター分析では，孤独感は，疎外感や不安感等の感情と類似しているということが明らかにされた。この点に関して，FIG. 1で検討してみると，青年期の孤独感は，縦軸の関係性の次元からみると，疎外感に比べ自己とのかかわりが強く，不安感よりは自己外の対象への関心が強い場合に感じる生活感情であるといえる。また，横軸の志向性の次元からみると，孤独感は，疎外感と親和志向性の強さは同程度である。そして，劣等感や自己嫌悪感よりは，少し親和志向性が強い場合に感じる感情である。これは，次のようにもいえよう。孤独感を感じている人の志向性が，もっと達成志向に片寄れば，孤独感は自己嫌悪感や劣等感またはそれらと類似した感情となる。また，関心が，より自己外の対象や人間に向けられるようになれば，孤独感は，疎外感かまたはそれに近い感情に変わる。さらに，孤独感を感じる者の志向性が，達成志向に傾きかつそれがうまく果たせず，関心がより自己内に向き対象が明確化しにくい場合，孤独感は，不安感に近い感情となる。また，それと同程度の達成志向をもっているが，関心が自己外の対象に向けられる場合には，孤独感は，嫉妬や恐怖感に近い感情に変わる。

さらに，年齢別のクラスター分析の結果をもとにして，孤独感との相関係数が0.4以上の感情を，FIG. 1上で線で結ぶと，その感情群は，FIG. 1の点線の3角形と



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



なる。この結果からみると，青年期においては，年齢が上がるにつれて，孤独感と類縁する生活感情は，志向性の次元上で達成志向の方向への拡がりをみせている。したがって，中学生が孤独感を感じる心理状態と大学4年生が孤独感を感じる心理状態には，差異があると考えられる。あるいは，13才の青年と22才の青年が「自分はひとりだという孤独感を感じる」と同じ表現をしても，その意味内容には，差異があるとも考えられる。

先のクラスター分析によって，孤独感の類縁感情が解明された。しかしそれだけでは，解明しえなかった生活感情の関連構造が，因子分析によって明らかにされた。この関連構造の解明は，青年期における各生活感情の特徴を理解する上で，役立つと思われる。

しかし，本研究では，代表的な生活感情として選定された限られた生活感情を手がかりにして，クラスター分析や因子分析が行われ，生活感情の関連構造に関するひとつの解明が試みられたにすぎない。そのため，生活感情の関連構造図（FIG. 1）のいくつかの交点にあたる感情名は，未だ不明である。この点についての究明は，今後の生活感情の関連に関する研究に残された課題といえよう。

## 引用文献


Dorothy, M. G. 1976 The Psychology of Loneliness, Adams Press.

Geiwitz, P. J. 1966 Structure of bordom, *J. of personality and social psychol.* 3, 592-600.

宮下一博・小林利宜 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応の関係 教育心理学研究 29, 297-305.

落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造（I） 教育心理学研究 22, 162-170.

落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究 30, 233-238.

大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究 32, 100-109.

Russell, D., Peplau, L. A. & Cutrona, C. E. 1980 The Revised UCLA Loneliness Scale *J. of Personality and social psychol.* 39, 472-480.


(1984年11月13日受稿)



NII-Electronic Library Service